

湯原 徹：海藻の企画展「そうだ！海だ！海藻だ！ーいのちをつなぐ海の森ー」開催記

茨城県は太平洋側に約 190 km の海岸線を持ち、いくつかの温帯性海藻や亜寒帯性海藻の北限地や南限地となっている。しかし、ミュージアムパーク茨城県自然博物館では、これまでの約 50 回におよぶ企画展において、展示構成の一部を使って海藻を展示・紹介することはあっても、海藻について真正面から扱うことはしてこなかった。そこで 2010 年度、海を感じさせる真夏の時期にあわせ、海藻に関する企画展「そうだ！海だ！海藻だ！ーいのちをつなぐ海の森ー」を満を持して開催した。7 月 10 日～9 月 20 日（開館日数 64 日）で、計 111,613 名の来館者をお迎えすることができた。

企画展では、海藻を食卓でしかみることがない人にも興味・関心をもってもらえる展示、子どもたちにとっても楽しく分かりやすい展示を目指した。そのなかで特に以下のことを重視しながら紹介し、効果的にアピールする展示構成を試みた。

①海藻がもつ色の美しさや形の多様さ

親子連れが多い当館は、子どもたちが興味・関心をもてる展示を準備し、親子で学んでもらう工夫を必要としている。そこで、横浜康継氏の監修・協力で海藻の色のしくみを体感的に学ぶことができる展示をつくった。それは、カラーセロハンを色素に見立てて重ね合わせることで色のしくみを学ぶ展示（図 1）、LED を用いた装置を使って水深で太陽光が減光・減色することや、それにともなって海藻の色が違ってみえることを体験する展示である。また、野田三千代氏の美しい海藻おしば標本（実物）78 点を展示した。子どもも大人も楽しみながら学習し、海藻の色の美しさや形の多様さに興味をもってもらうことができた。

②海藻を利用した身近な製品

展示資料を収集する際には、三重県鳥羽市の海の博物館で 2008 年に開催された「海の恵み 海藻ー広がる未来への夢ー」の展示を参考とした。当館の担当者は原料に海藻を用いる業界約 100 社との交渉を試み、約 60 点の製品を展示した。海藻が捺染の原料、乾麺のつなぎ成分などに利用されていることをはじめて知った来館者も多かったようである。

③茨城県でよくみられる海藻

当館は開館して 16 年になるが、中庭正人氏により収集・寄贈さ



図 1 カラーセロハンを光合成色素に見立てた展示

れた海藻の押し葉標本を約 4,700 点収蔵している。この貴重な学術資料を展示するとともに、中庭氏が丹念に撮り貯めた海藻写真もスライドショーにして紹介した。

④水槽で生きて揺らめく海藻の生体展示

この展示には、大変苦勞させられた。120 cm 水槽、人工海水、本来は藻体が消えてしまう夏、という数々の悪条件を乗り越えながらの展示であった。アクアワールド茨城県大洗水族館のスタッフの協力のもと、パワーヘッド（水中用ポンプ）を使うことで水の流れをつくる、水温を 19°C まで下げる、照度を調整するなど、当たり前の工夫ではあるが、本当に試行錯誤であった。また、入り口に展示したウミブドウ（クビレツタ）は約 15 日おきに交換、イワツツ類は会期中に 3 回ほど遊走子を放出して水槽内を白く濁らせて溶けたために交換、タマハハキモク（図 2）やオオバモクは会期中に採集に何度も出かけることになった。海藻を展示したというよりは、なんとか海藻を 3 か月もたせたというのが正しい表現なのかもしれない。しかし、来館者には水槽内で生きて揺らめく海藻をみてもらえ、特にオオバロニア（いおワールドかごしま水族館の提供）の珍しい形状にも感激してもらえた。また、揺らめく海藻をみて涼を感じてもらえたようでもある（真実のところは、海藻を維持するために展示室の室温を通常より低く設定したからかもしれないが…）。反面、夏の海でも海藻が揺らめいて生育しているという大きな誤解を来館者にもたせたかもしれないというのが少し心配な点である。



図 2 水槽で揺らめくタマハハキモク

海藻に関してほとんど知識のない自分が、なんとか無事に海藻に関する展示をすることができたのは、横浜康継氏、中庭正人氏、野田三千代氏をはじめとし、多くの藻類学会員の方々に、ご助言やご協力いただけたからだ、と、企画展終了後に改めて強く感じている。この場をお借りして深く感謝を申し上げます。

（ミュージアムパーク茨城県自然博物館）